

流行歌「三朝小唄」について

大西秀紀 (レコード収集家)
E-MAIL ban-jin@ya2.so-net.ne.jp

1. 小唄とは

小唄は小歌とも書き、古くは奈良時代に見られる歌謡の名称で、その内容は時代によりそれぞれ異なる。近現代における小唄とは、幕末に江戸で流行した端唄から派生した、演奏時間が3～4分程度の、爪弾きの三味線による小歌曲である。明治末以降盛んになり、戦後大ブームを迎えた。春日 堀・蓼 田村など200以上の流派がある。⁽¹⁾

しかし同時に民謡 俗曲・はやり歌や昭和期の流行歌などを、小唄と称する場合が多数ある。船頭小唄」 沓掛小唄」 祇園小唄」 「ラバウル小唄」 「お座敷小唄」 など、曲名に小唄を名乗るものは後者の例である。⁽²⁾ これらの歌は、レコード以前には、花街や寄席あるいは劇場や街頭の演歌師を通じて世間に広まったが、明治・大正期のレコード産業が取り上げることで、その広まり方は全国的なものとなった。しかし当時の業界の姿勢は、既成の純邦楽や市井で流行しているものをレコード化するのが一般的で、自ら流行を作り出すにはまだ消極的であった。⁽³⁾

2. 昭和初期のレコード会社設立と地方小唄

昭和に入り、コロムビア・ビクター・ポリドール等のレコード会社が相次いで設立され、昭和3年ビクターから発売された「出船の港 (唄 藤原義江)」 「波浮の港 (唄 佐藤千夜子)」 「アラビヤの歌 (唄 二村定一)」 などの思わぬヒット曲が生まれる。これらの曲はラジオでも盛んに紹介された。歌の流行がそのレコードの売上げに繋がり、レコードの売上増が

さらに歌の流行を生み出すことに気付いた各社は、積極的に流行を作り出す姿勢に転じるようになる。作詞・作曲・編曲に専門のスタッフを置き、譜面を扱える歌手・演奏家を揃え、プロデュースと販売にそれぞれ文芸部・営業部を設けることにより、音楽産業を担う企業としての体制を整えた。企画力・販売力がヒットを左右する時代に入ったのである。⁽⁴⁾

このときレコードに採用されたジャンルの一つに、地方小唄がある。大正12年長野県須坂町の山丸組製糸会社の女工唄として作られた「須坂小唄」 (野口雨情作詞・中山晋平作曲・藤間 (藤蔭) 静枝振付) を皮切りに、観光のPRソングや地域の催し用として、各地の観光協会・新聞社・電鉄会社・市町村等の協賛を得て、これらの地方小唄は続々と生み出されていた。野口雨情・北原白秋・中山晋平・藤井清水・藤蔭静枝・四家文子等を始めとする、大正中期に起こった民謡・童謡・舞踊の新運動に関わったメンバー達が、地方小唄の制作に携わり、同時に昭和初期の新しいレコード会社の制作スタッフとしても活躍した。⁽⁵⁾

地方小唄の特徴のひとつとして、舞踊家による振付がなされている点が挙げられる。単に唄うだけでなく、唄を伴奏とした踊りの輪に参加できることも、地方小唄が支持された大きな要素であろう。そしてレコード化と拡声装置の発達が果たした役割も極めて大きいものであったといえる。

3. 三朝小唄とそのレコード

三朝小唄 (野口雨情作詞・中山晋平作曲・島田豊振付) は、昭和2年8月6日、鳥取県倉吉町教育会主催の音楽舞踊演奏会に於いて、佐藤千夜子

の唄、中山晋平の伴奏で発表された。島田指導による踊りの披露や中山による参加者に対する歌唱指導もあり、大盛会であったといふ⁽⁶⁾発表時の歌詞は次の3節であった。

1. 泣いて別れりゃサイシヨ空までエ
ヨイトヨイトサノサ曇る
曇りゃ三朝がヨ ヤレ三朝がヨ 雨となるヨ
2. 大瀬ぼうきぢやサイシヨ三朝がエ
ヨイトヨイトサノサ見えぬ
三朝山蔭ヨ ヤレ山蔭ヨ 山の中ヨ
3. 三朝湯の神やサイシヨ一人がエ
ヨイトヨイトサノサ好き
一人や寝させぬヨ ヤレ寝させぬヨ かへし
やせぬヨ

この曲の成立に関しては、鳥取県下を旅行中の野口・中山・島田達が、偶然三朝温泉を訪れたところ大歓迎を受け、その宴席で即興的に作られた」といった逸話が残されている⁽⁷⁾、あらかじめ三朝村長から作謡の依頼を受けた雨情達が、構想を練りながら三朝を訪れ、現地でまとめ上げたというのが事実のようである⁽⁸⁾。昭和37年5月、振付の島田豊は再び現地を訪れ、舞踊講習会を開いた。後に島田はその自伝で「誠に残念な事には唄や曲は印刷で残りますが、踊りは時代が変り人が変り、原舞は残っていません。三朝小唄だけは戦後、再びゆき手直してきました。原舞通りで嬉しい限りです」と語っている⁽⁹⁾。

三朝小唄のレコード発売は倉吉町での発表から約2年後の昭和4年4月で、葭町二三吉(後の藤本二三吉)の唄でビクターより発売された(1枚2面、ビクター50686、図1)。三味線・尺八・囃子の純邦楽伴奏である。ビクターは昭和3年4月の同社邦楽レコード第1回発売以来、これまでにほぼ毎月1~2枚の割合で地方小唄のレコードを発売していた。しかし既に各地で発表された曲をレコード化している場合が多く、三朝小唄の現地発表からレコード化までの時間差も、当時のビクターにおいてはごく自



図1：葭町二三吉「三朝小唄」(ビクター50686)



図2：花柳貞奴・佐々木清子「三朝温泉節」(ポリドール151)

然な流れであったといえよう

レコードでの歌詞は前記3節に加筆され、合いの手2節を含む計10節から成っている。なお『定本野口雨情 第5巻』(未来社、1986)には、この内最後の1節を除く計9節が収録されている。したがってこの二三吉盤が三朝小唄の作詞・作曲の標準を伝えていると考えて差し支えないだろう。この曲はその後昭和10年7月に西条八十補詞として小唄勝太郎盤(ギッチョ節(上州小唄))とのカップリング、ビクター53458が発売され、戦後は市丸や喜久丸の盤がいずれも同じビクターより発売された。しかし後発盤はどれも約3分程度の録音のため、歌詞の内いずれかの部分がカットされている。

二三吉盤はあらためて原作者によって手を加えられ、再度公式発表された三朝小唄であるが、これとは異なる道を歩んできた三朝小唄の姿を伝えるレコードとして「儂謡 三朝温泉節(唄 花柳貞奴・佐々木清子、他)」(1枚2面、ポリドール151、図2)がある。

ポリドールは昭和5年1月に、同社邦楽レコード第1回発売として約50枚を発売したが、これはその中の1枚。演者の経歴等については今後の調査を待つところである。しかし花柳貞奴と佐々木清子は、この時期ポリドールやビクターに、「安来節」「鯛掬ひ踊」「出雲節」「関の五本松」あるいは「休曾節」「草津節」といったものを多数吹き込んでいたところから、当時人気を博していた安来節一座の歌手と思われる。安来節一座の舞台では、各地の民謡はいろどりとして唄われたり、あるいはアンコと称して

浪花節や流行歌とともに、安来節の中に挿入され唄われていた。

この盤の曲名は異なるが、内容は三朝小唄と同一である。ただ前記二三吉盤が中山晋平の譜面通りであるのに対し、こちらは明らかに耳で覚えたという唄い方で、メロディーの細部は微妙に異なっている。またその歌詞は、

三朝よいとこサイショ一度はエ
ヨイトヨイトサノサおいで
お湯の中にもヨ ヤレ中にもヨ 花が咲くヨ

と草津節をもじったもので始まり、続く第2・3・4節は前記発表時の3節、その後二三吉盤にはない15節が続き、最後に冒頭の「三朝よいとこ」で締め括る計10節で構成されている。また二三吉盤に含まれる「出雲の帰りにやまたおいで」の合いの手部はなく、すべて同じメロディーの繰り返しである。

この貞奴・清子盤は明らかに二三吉盤の後追いでありながら、その影響を受けていない点が注目される。つまり昭和2年8月に地元で発表された3節の三朝小唄が、その後人々の間で流行し、先々で詠み人知らずの歌詞を加えられながら、昭和4年にはすでに安来節の舞台上で唄われていたことを示すものではないだろうか。⁽¹¹⁾

しかし昭和5年1月に発売されたこの盤は、早くも同年6月の総目録からは姿を消している。あくまでも想像の域を出ないが、第1回発売のリストに三朝小唄をピックアップしたポリドールの文芸部には、単に三朝の一俚謡としての認識しかなかったのではないだろうか。しかしこの曲には野口・中山という作者が存在し、しかもビクターからすでにレコード化されている。つまり作品の無断使用ということになり、発売早々廃盤の憂き目に合ったものと思われる。

この「三朝温泉節」は当時のポリドールの月報に、同時発売の「草津節」と合わせて次のように紹介されている。

昭和4年度、花柳界と云わず、芸界と云わ

ず、カフェ、バーと云わず、街頭と云わず、汽車、汽船の中まで侵入した二つの俚謡は「三朝節」と「草津節」でせう。しかも、その素朴な味は、紹介されて後、流行時代を経ても更に根強い敷衍性を有してゐます。

三朝温泉(ミササ)は山陰道の古い温泉、草津は、お医者様でも草津の湯でもとまで云はれるいでゆ、東西の有名な温泉に生まれた俚謡が同時に昭和年代を風靡してゐるのは一奇とすべきでせう(後略)⁽¹²⁾

第1回発売を飾るセールスコピーとはいえ、三朝小唄の大衆への浸透ぶりがうかがえて興味深い。一方二三吉盤のヒットを示す具体的な数字は、ビクターの営業資料が戦災で消失されたため不明である。しかし三朝は当時すでに世界第2位の含有量を誇るラジウム泉や、温泉治療の近代設備を備えた村営療養所で知られていたが、「無名の湯治場が大温泉街になった」とその後の語り草になるほど、この曲のヒットは三朝温泉の名を全国的なものにした。同時に以後のレコードカタログに続々と登場する地方小唄のさきがけとなったことは事実である。⁽¹³⁾⁽¹⁴⁾

地域とメディアの共同プロジェクトともいえるこの企画の成功は、レコードが持つ多くの可能性を社会に示したといえる。そして三朝小唄は、戦前の流行歌黄金時代の幕開きを告げる一曲となったのである。

注

(1) 木村菊太郎『江戸小唄』(演劇出版社、1981) 24-74頁、湯浅竹山人『歌謡襍稿』(東北書院、1931) 133-150頁、湯浅竹山人『小唄漫考』(アルス、1926) 127-164頁、548-555頁、平野・上参郷・蒲生監修『日本音楽大事典』(平凡社、1989) 545-555頁。

(2) (1)に同じ。

(3) 森垣二郎『レコードと五十年』(河出書房新社、1960) 107-164頁、倉田喜弘『日本レコード文化史』(東京書籍、1979) 241-300頁、添田知道『流行歌・明治大正史』(刀木書房、1982) 377-388

- 頁。
- (4) 森本敏克『管盤歌謡史』(白川書院、1975)15-28頁、岡田則夫 続・蒐集奇談 101回『レコード・コレクターズ』1999年6月号、ミュージック・マガジン社、108-114頁。
- (5) 古茂田・矢沢ほか編『新版 日本流行歌史 上』(社会思想社、1994年)95-102頁、東道人『野口雨情 詩と民謡の旅』(踏青社、1995年)520-523頁。
- (6) 東、同書、101-103頁、山崎勉編『三朝町誌』(鳥取県東伯郡三朝町役場、1965)595-597頁。
- (7) 仲井・丸山・三隅編『日本民謡辞典』(東京堂出版、1996)318頁や、長田・千藤編『日本の民謡 西日本編』(現代教養文庫1605、社会思想社)170頁、あるいは東(前掲書)が引用している、泉漾太郎『野口雨情回想』(筑波書林、1981)など、時期などは微妙に異なるが、偶然三朝温泉を訪れた野口雨情・中山晋平が歓待を受け、宴席で即興に作ったというストーリーは一致している。
- (8) 東、前掲書、101-107頁、山崎、前掲書、595-597頁。
- (9) 島田豊『波瀾万丈八十年』(島田舞踊研究所、1980)10頁。
- (10) たとえば、昭和3年4月発売「よさ節(大正13年11月発表)」、同年5月発売「波浮の港(大正13年6月発表)」、同年8月発売「須坂小唄(大正12年発表)」、甲州音頭(昭和3年3月発表)」、同年9月発売「中野小唄(昭和2年2月発表)」、昭和4年1月発売「岐阜伊奈波音頭(昭和2年2月発表)」、長良節(昭和3年8月発表)」、犬山音頭(昭和2年発表)」など。
- (11) 安来節の舞台上で唄われる三朝小唄の例としては、布目監修『安来節 三朝小唄、八木節入り』『お笑い百貨事典 大正時代・大正モダンの波を受けて KICH 2323』(キングレコード、2000、2曲目)がある。浅草木馬亭でのライブ録音。ここでの三朝小唄は「三朝よいとこ、一度はおいで、三朝湯も出る、酒も出る(離子ことばは引用者省略)」という歌詞で始まる。また合いの手部も唄われている。
- (12) 邦リドル(邦楽)レコード第1回新譜、昭和5年1月『(日本ポリドル蓄音器商会、1930)11頁。
- (13) 三朝小唄が地元にもたらした影響については、「三朝温泉がまだ田圃の中の湯治場だった頃、(中略)この唄がレコードになると三朝温泉も全国に知られるようになった」(仲井他、前掲書)、「当時、15軒しかなかった三朝温泉は全国的に知られるようになった」(長田他、前掲書)、「宿屋が2-3軒しかなく、世間に知られていなかった三朝温泉が三朝小唄のお陰で立ちどころに50軒も旅館が立ちならぶようになり」(古茂田他、前掲書)と様々な記述が見られる。三朝小唄が発表される前月、大阪毎日新聞主催の日本八景選定において、三朝温泉は八景、二十五勝の選には洩れたが日本百景のひとつに選ばれた(『日本八景』大阪毎日新聞、1927年7月6日朝刊)。また予選段階の読者による人気投票では、全国の温泉部門において第5位に入る健闘を見せている。この本選結果発表以前の6月10日の紙面に三朝温泉の紹介記事が載り、そこには13軒の旅館が名を連ねている。また『三朝町誌』によると昭和5年には16軒、昭和26年には23軒の旅館が確認されている。
- (14) 福田・加藤編『昭和流行歌総覧 戦前 戦中編』(柘植書房、1994)2-243頁。

附記 本稿は、立命館大学アート・リサーチセンター秋季連続講演会 第4回「無声映画、等持院に還る! 第二弾 甦るマキノ映画」配布資料用解説文に加筆したものである。またその際、郡修彦氏よりポリドルに関する資料のご提供を、亀ヶ谷行雄氏より安来節演者に関するご教示を賜った。ここにあらためて御礼申し上げます。